

民主主義派についての特長づけ

ここではただ、前者すなわち、その進歩的な側面によって、ロシアのナロードニキ主義が西ヨーロッパの民主主義と接近していること、したがって、それには四十年以上もまえにフランス史の事件についてあたえられた、つぎのような民主主義の天才的特徴づけが、まったくあではまるということをつけくわえるにとどめよう。

「民主派は、自分が小ブルジョアジーを、つまり両階級の利益が同時にたがいに中和しあう**過渡的な一階級**を代表しているという理由で、自分はおよそ階級対立を超越しているものと思ひこむ。彼らは、一特権階級が自分に対立しており、自分はこの周りの国民全部といっしょに**民衆**を構成していることをみとめる。自分が代表しているのは**民衆の権利**だ。自分の関心事は**民衆の関心事**だ。だから、〔きたるべき戦いに〕自分は種々の階級の利害や立場を検討するにはおよばない。自分のもちあわせる手段について、あまりにも小心翼翼と考えるにはおよばない。（ロシアのナロードニキにそっくりだ。彼らは、生産者に敵対的な階級がルーシに存在することは否定はしない。だが彼らは、「人民」のまえではこれらの「略奪者」は取るにたりないものだという論議でみずからをなぐさめ、各個の階級の状態と利害とを正確に研究しようとせず、生産者のある部類の利益が「略奪者」の利益とからみあっていて、前者の后者にたいする抵抗力を弱めているのではないかということを検討しようとしない。）……もしいざ実行する段になって、自分の関心がじつは**無関心**、自分の力がじつは**無力**だとわかるなら、それは不可分の民衆を種々の相敵対する陣営に分裂させる危険な詭弁家のせいか、（ロシアのナロードニキにとっては、このことに罪があるのは、「社会的相互順応性」と「連帯行動」〔ストルーヴェ氏の引用したヴェ・ヴェ・氏の言葉。161 ページ〕の花が、これほどみごとに咲きほこっている土地に、資本主義とその階級的敵対とをうえつけている邪悪なマルクス主義者なのである。）……あるいは実行の細部の失敗のために全体が失敗したか、あるいは予想されなかった偶然がこんどの勝負をだめにしたか、そのいずれかである。いずれにせよ民主派は、屈辱きわまるこの敗北に罪なくして陥ったように、この敗北からも潔白な身でぬけだす。しかも、自分は勝つにちがいないし、自分と自分の党が古い立場をすてるのでなくて、逆に事情が自分につごうよく熟してくるべきだ（ihm entgegenzureifen haben）、というあらたに得た確信をもってである。」（『ブリュメール十八日』三九ページ）〔選集、第五巻、322 ページ〕

第一巻 ナロードニキ主義の経済学的内容 P482-483

コメント

「各個の階級の状態と利害とを正確に研究しようと」しないものは、敗北しても反省せず、「この敗北からも潔白な身でぬけ」だし、「事情が自分につごうよく熟してくるべきだ、というあらたに得た確信をもって」事に当たる。根本を見ない精神論と楽観論が支配する。